

加西市亀山古墳の埴輪生産

吉永 健人

1. はじめに

亀山古墳は、加西市北条盆地に位置する玉丘古墳群（図1）を構成する古墳のひとつで、長径 48 m、短径 44 mの平面楕円形を呈する。昭和 12 年の不時発見による発掘調査（第 1 次調査）では、2 基の埋葬施設が発見され、優れた副葬品群が見つかった（梅原 1939、加西市教育委員会 2005・2006 ほか）。その後、平成 15・16 年度に実施された第 2 次調査では、第 1 次調査で検出された埋葬施設の詳細が分かったほか、第 1 埋葬施設に併設されていた副葬品埋納施設や、墳丘の形態、規模、や外表施設に関する情報など、貴重な成果があがった（加西市教育委員会 2005）。その中でも、各トレンチで検出された埴輪列では、多くの埴輪が出土し、亀山古墳の時期や系譜を考えるうえで重要な情報が得られている。本稿では、亀山古墳出土の埴輪について、その生産・供給にかかるあり方を検討し、玉丘古墳群全体における位置づけを探ってみる。

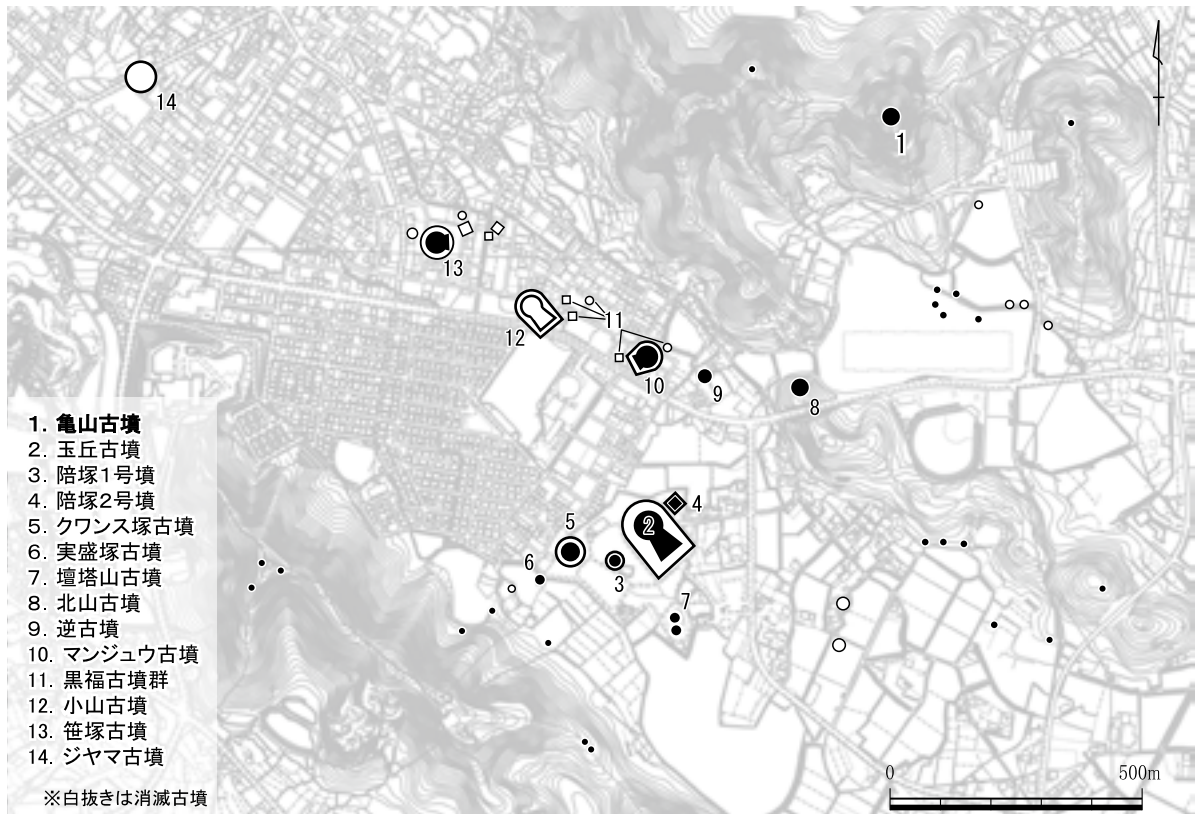


図1 玉丘古墳群の分布図

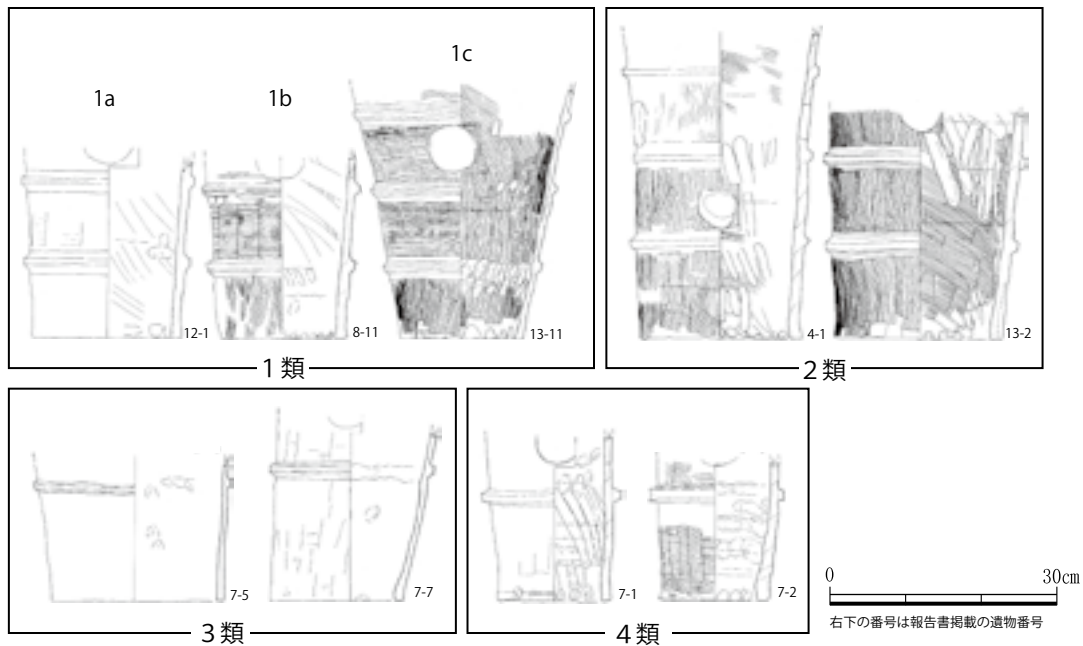


図2 亀山古墳出土埴輪の分類

2. 亀山古墳出土埴輪の再検討

(1) 分類

亀山古墳の埴丘は岩盤を削り込むことで整形されており、テラス面をなすような段築構造はなく、埴輪列は埴丘の裾を示すような形で古墳外縁をとりまいていたことが第2次調査で判明している⁽¹⁾。この埴輪列からは、原位置を保つ約40本の円筒埴輪が出土し、全形が判明している資料はないが、おおよそ3条4段程度の円筒埴輪で占められると考えられる。以下ではまず、第2次調査報告(加西市教育委員会2005、以下「報告書」)の内容をふまえて、改めて亀山古墳の埴輪を分類する(表1・図2)。

1類 底部高9～10cm、突帯間隔9～11cm。底径15～22cm。透孔は3段目に穿たれる。焼成は良好なものが多い。外面調整はB種ヨコハケ(板ナデ)、内面調整はナデ。1類はさらに、内外面の調整方法などの差異から1a～1cに細分が可能である。

2類 底部高約13cm、突帯間隔約11cm。底径約21cm。透孔は2段目に穿たれるものと3段目に穿たれるものがある。焼成は良好。外面調整はタテハケのみで仕上げるものと、静止痕を残さない水平なヨコハケを施すものがある。内面調整はタテハケ。

3類 底部高約15～17cm。底径21～22cm。透孔は2段目・3段目に穿たれる。焼成は甘いものが多い。外面には、工具静止痕が不規則に残るBb種ヨコハケを施し、ハケメは不明瞭である。内面調整はナデ。器壁が他のタイプに比べて薄い。

4類 底部高約15cm。底径14～15cm。透孔は2段目に穿たれる。焼成は良好で橙系の色調を呈する。外面には、ピッチの狭いB種ヨコハケを施し、内面調整はナデ。

表1 亀山古墳出土埴輪一覧

報告番号	類型	底径 (cm)	底部高 (cm)	突帯 間隔 (cm)	外面調整 底部	外面調整 胴部	内面調整	ハケメ パターン	工人	同工品
1-1	1類	17.6			タテハケ	不明	ナデ		A	1-4
1-2	1類	17.2			不明	不明	ナデ			
1-3	1b類	21	10.7		タテハケ	不明	ナデ		A	1-1
1-4	?	19.8			不明	不明	ナデ			
1-5	1a類	19	9.6	10	不明	Bc	ナデ		B	8-9
4-1	2類	21	13.2	11.1	タテハケ	タテハケ	ナデ			
5-1	1a類	18	10	10.5	不明	Bc	ナデ		C	5-2,12-1,12-4
5-2	1a類	17	10.3		Bc	Bc	ナデ		C	5-1,12-1,12-4
7-1	4類	15	14.7		B	不明	ナデ	①	D	7-2
7-2	4類	14.2	14.6		B	B	ナデ		D	7-1
7-3	3類	21.6	15.3		不規則Bb	不規則Bb	ナデ		E	7-6
7-4	3類	21.1	15.5		不明	不明	ナデ		F	7-5
7-5	3類	22.5	15.5		不明	不明	ナデ		F	7-4
7-6	3類	20.2	15.7		不規則Bb	不規則Bb	ナデ		E	7-3
8-1	3類	21.2			不明	不明	ナデ		G	8-3
8-2	3類	18.2	18.2		不規則Bb	不明	ナデ			
8-3	3類	22.2	15.9		不規則Bb	不明	ナデ		G	8-1
8-4	3類	21.1			不明	不明	ナデ			
8-5	1b類	20	10	10.6	タテハケ	B	ナデ			
8-6	1b類	19.8	9.5	9.8	タテハケ	Bc	ナデ	②	H	8-7,12-2
8-7	1b類	20.4	9.5	9.8	タテハケ	Bc	ナデ	②	H	8-6,12-2
8-8	1b類	17.2	10.2	10.1	タテハケ	Bd	ナデ	③	I	8-11,12-5,12-6,12-7
8-9	1a類	16.9	9.9	10	不明	Bc, Bd	ナデ		B	1-5
8-10	3類	18.8			不明	不明	ナデ			
8-11	1b類	16.5	10	10	タテハケ	Bc, Bd	ナデ	③	I	8-8,12-5,12-6,12-7
12-1	1a類	19.6	10.3	10.5	不明	Bd	ナデ		C	5-1,5-2,12-4
12-2	1b類	21.5	9.6	10.1	タテハケ	Bd	ナデ	②	H	8-6,8-7
12-3	1b類	18.4	10.1	10.6	タテハケ	ヨコハケ	ナデ	④		
12-4	1a類	16.2	10.6		不明	Bc	ナデ		C	5-1,5-2,12-1
12-5	1b類	18	10.5		タテハケ	不明	ナデ	③	I	8-8,8-11,12-6,12-7
12-6	1b類	19.5	10.1		タテハケ	不明	ナデ	③	I	8-8,8-11,12-5,12-7
12-7	1b類	21.6			タテハケ	不明	ナデ	③	I	8-8,8-11,12-5,12-6
13-1	1c類	18.4	9.9	10.1	タテハケ	Bd	ハケ	⑤		
13-2	2類	21.7	12.6	11.5	タテハケ	タテハケ	ハケ	⑥		
13-3	1c類	21.8	11.1	10.4	Bc	Bc	ナデ	⑤		
13-4	1c類	18.5	10.3	10.3	タテハケ	Bc	ハケ	③		
13-5	1c類	19.2	10.5		タテハケ	Bd	ハケ	⑦		
14-1	2類	21	12.7	10.8	タテハケ	Bc	ナデ	⑧		

報告書をもとに、筆者実見のうえ作成（原位置出土の資料のみ）。
工人は同工品が複数ある場合にのみアルファベットを記載。

報告書による分類と大きくは変わらないが、報告書では分類が保留されていた一群（4-1・13-2・14-1）について、属性的まとまりが認められるものとして本稿では2類として設定した。また、規格や外面調整の特徴から、当古墳の埴輪は埴輪編年Ⅳ期後半に位置づけて大過なからう。

（2）工人組織像

以上、亀山古墳は大きく4類型に分類することができる。各類型は、形態・技術的なまとまりを有しながらも、細かな手法や形態には小異が認められることから、これらは工人組織におけるグループに対応するものと理解できる。そしてもっとも亀山古墳の埴輪を特徴づけるのは、各類型間での技術・形態の差である。比較的資料数の多い1類と3類を比較してみると、底部高・突帯間隔が約10cmで、安定したB種ヨコハケを施す1類に対し、3類は底部高が15～17cmと極めて高く、外面には静止

痕が不規則に並ぶB種ヨコハケを施すなど、差異が際立つ。特に3類は、器壁が非常に薄く仕上げられているせいか器形も安定しておらず、突帯の整形をはじめとする造形技術にも稚拙な印象を覚える。くわえて興味深いのは、焼成具合も両者で差異があることであり、1類は焼成が良好であるのに対し、3類は焼成が甘いものが多く、焼成の工程においても両者には一定の距離があったことが推定される。残る2類と4類は資料数が少ないが、2類は底部高がやや高く、2次調整B種ヨコハケを省略するという点において、1類との差異はあるが、3類ほどの技術的格差を捉えることは出来なため、ある程度手慣れた工人による所産と考えられる。4類は底部高が高く、細長い器形を呈する点で特殊さが目立っており、熟達していない工人による所産、あるいは特殊な器種である可能性を考えておきたい。

このように、亀山古墳の埴輪は類型間での様相差が大きく、全体で品質が統制された生産体制というよりはむしろ、各グループが抱えた工人の技術レベルには一定の差があったと考えられる。特に1類と3類にみる技術格差からは、王権中枢部での埴輪製作技術を兼ね備えた前者と、地元で動員されて最新の技術に通じていない後者とも捉えうるような、工人グループ間の関係性が推測される。資料的制約があるため即断はできないものの、技術的に安定している1類は他のタイプと比べて出土数が多いことから、熟練工人からなる1類のグループが中心となって製作を主導し、多くの製品を生産供給した可能性が高い。

ここで、もう少し当古墳の工人組織像について解像度を高めるため、細かな工人の癖やハケメの異同などを手がかりに工人の実態を探ってみると以下のことが分かる。まず、類型をまたいだハケメパターンの一致は認められないのに対し、類型内ではハケメが共通する個体が存在するというのである。例えば、1類の8-8をはじめとする同工品群(表1の工人Iのもの)と13-4は、各手法の差異から、異なる工人による製品と考えられるが、同じハケメパターンが抽出できる(図3)。つまり、グループ間では一定の距離がある一方で、同一グループ内では、工具を貸借できるような緊密な距離感の中で製作をおこなっている様子が推測できる⁽²⁾。ほかにも、3類はハケメが残っていないため、ハケメパターンを手がかりにすることはできないが、突帯の形態に見えるバリエーションなどから、複数の工人が存在することが想定できる。全体の具体的な人数は割り出すには資料的制約が大きいが、最も資料数の多い1類では、5組の同工品が抽出でき、5人前後の工人の存在が推定できる。このように、各グループは複数の工人から構成されており、そのグループ内では緊密な距離のもとで製作がおこなわれたものと理解できる。

3. 亀山古墳の埴輪配列

ここまで、亀山古墳の埴輪について工人組織像を検討した結果、複数の工人からなるグループが認識できた一方で、グループ間の技術差からは、工人系譜を異にするような集団が製作に携わっていることが想定できた。

ここで、上記の類型を樹立位置と照らし合わせてみると、報告書で森島一貴が的確に指摘している

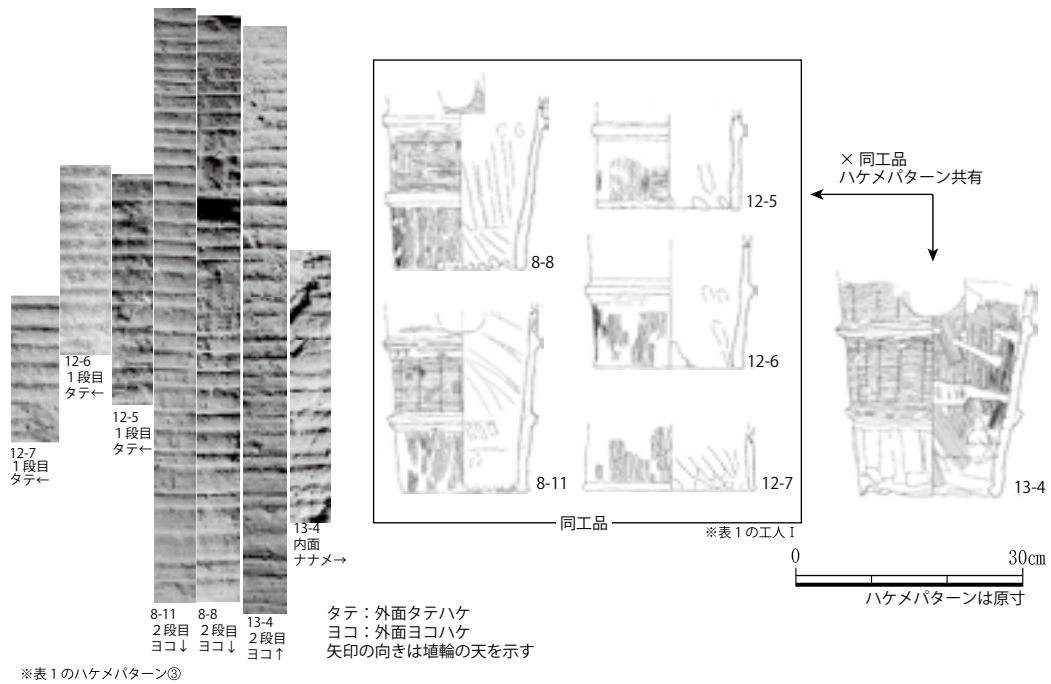


図3 グループ内（1類）でのハケメパターンの共有例

通り、これらの埴輪は類型ごとにまとめて古墳に配列されていることが分かる（森島 2005）。具体的には、1類は墳丘北側の第1（11）・5・13 トレンチと、南側の第8・12 トレンチに、2類は北西側の第4・13・14 トレンチ、3類・4類は南東側の第7・8 トレンチに集中して配列されている（図4）。生産時における単位、すなわち工人グループごとの製品のまとまりが、樹立時にも大きく崩れることなく持ち込まれているのである。先述したように、各類型間の様相差は焼成具合にまで及んでおり、各グループの製品は焼成過程においても一定の距離が存在した可能性が高い。このように考えると、亀山古墳における埴輪の供給は、完成したものをバラバラに供給されたり、どこかで各類型が一緒くたに集積されたりするのではなく、製作→焼成→配列という一連の過程の中で、各グループの製品はまとまったまま古墳へ持ち込まれて設置された蓋然性が高い⁽³⁾。そして、1類の埴輪が古墳の北と南に分かれて集中することから、製品群の古墳への移動は複数回にわたるものということも推測できる。

また、亀山古墳の埴輪列では一定の間隔でピットが検出されている。各ピット間は直線的な埴輪列で埋められており、全体としてピットを頂点とした多角形をなすように、古墳の周りを埴輪列が巡っている。なお、このピットは埴輪列の線上にはありながらも、埴輪列とは堀方を共有しておらず独立している。このピット上に本来何かが樹立していた可能性はあるが、ピットを境に埴輪列が屈曲して結ばれている状況に鑑みれば、各ピットが埴輪列形成時の基点として機能していた可能性が高い。そして、このピットの役割を考える上で示唆的な状況が第8 トレンチで認められる。すなわち、当トレンチでは、ピット東側から第7 トレンチにかけては3類と4類が、ピット西側から第12 トレンチにかけては1類が主体となって配列されており、ピットを境とした明確な置き分けが見てとれるのであ

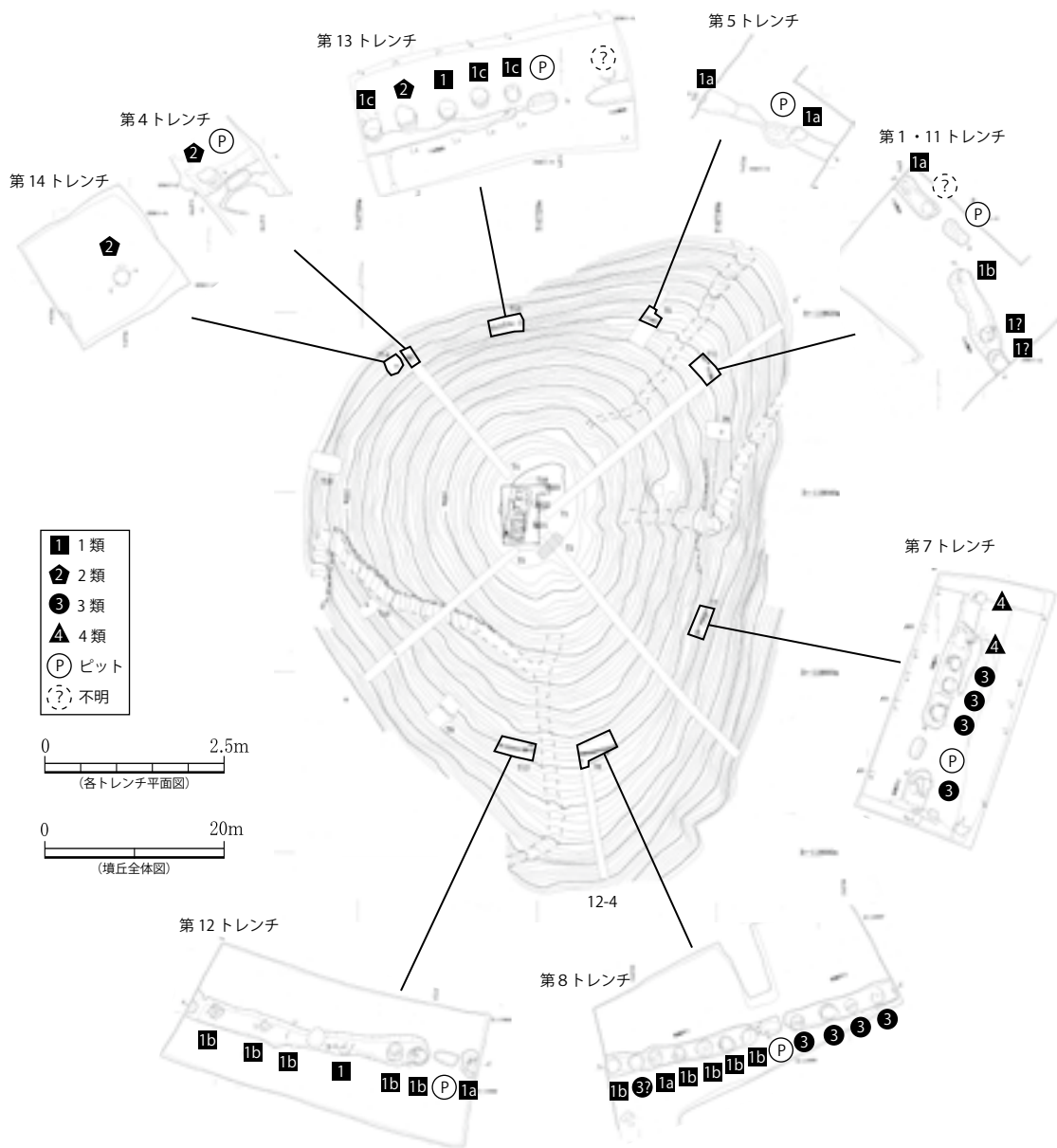


図4 亀山古墳の埴輪配列

る。報告書でも指摘されているように、ピットで区切られた短い区間が単位となって、埴輪配列がおこなわれたと考えることができよう。そのように考えると、ピット間埴輪数（9～10本）を単位として、各グループの担当数も割り当てられ、グループごとにロットとしてまとめられて古墳へ供給されたという状況も想定できよう。やや推測を重ねたが、亀山古墳の配列状況は、生産から樹立にいたるまでのプロセスを考える上で示唆に富むものである。

4. 亀山古墳出土埴輪の再評価

(1) 埴輪の系譜

ここまで、亀山古墳の埴輪について、その生産体制や樹立の状況をあらためて検討してきた。本章

では、上記の検討結果をふまえて、玉丘古墳群における位置づけを探り、本論をまとめることにしよう。

亀山古墳が位置する山陵の眼下には、玉丘古墳を中心とする玉丘古墳群が展開している。前方後円墳である玉丘古墳を頂点に、中小の帆立貝式古墳や円墳・方墳が有機的に築造されており、その造営状況は古墳時代中期における「階層構成型古墳群」（和田 1994）として捉えられる。形態・規模ともにバリエーションに富む古墳からなる玉丘古墳群だが、発掘調査によって多くの埴輪が出土しており、当古墳群の展開過程や古墳間の関係を探るための重要な考究材料として検討されてきた。これまで示された大まかな玉丘古墳群の前後関係を埴輪編年にもとづき概観すると、玉丘古墳・クワンス塚古墳（埴輪編年Ⅲ期）→小山古墳・笹塚古墳・マンジウ古墳（Ⅳ期前半）→亀山古墳・北山古墳（Ⅳ期後半）という順序が想定されている。

玉丘古墳群の埴輪に関する研究の中でもとりわけ注目されてきたのは、埴輪の形態差と、そこから想定される工人系譜の差異である。つまり、当古墳群の埴輪には、王権中枢部における最新の製作技術を用いて作られた一群と、そうした技術を受容していない未熟な技術のもとで作られた一群の存在（図5）が捉えられてきたのである（森 2017、藤原 2022 ほか）。この両者、いわば前者の王陵系埴輪と、後者の非王陵系埴輪（高橋編 2008a・2008b、廣瀬編 2023）⁽⁴⁾は、玉丘古墳群の各古墳で見出されており、埴輪生産における中央と地域の関係を示す好例として取り上げられてきた。

翻って、本論でみてきた亀山古墳の埴輪をしてみると、王権中枢部にみられる製作技術を兼ね備えた熟練工人による1類（・2類）と、そうした“王陵的な”技術が欠落・変容した3類・4類というように、技術的格差をもった異なる工人集団が協働していたことは、すでに指摘した通りである。特に後者の埴輪にみられる、高い底部高という特徴は、玉丘古墳やクワンス塚古墳等でみられる非王陵系埴輪と共通しており、工人の系譜的つながりが示唆される。つまり、本論で再整理した亀山古墳の工人組織のあり方は、玉丘古墳やクワンス塚古墳を契機とする組織編成の秩序の中で読み取ることができるのである。

しかしながら、これまで玉丘古墳群の埴輪で大別されたこの両群は、整然と二分されるようなものではない。非王陵系埴輪にみる形態的・技術的特異性は、規格設定、内外面調整、成形技法など、実にさまざまな形で表れており、共通の製作規範が脈々と受け継がれるような一系的な技術系譜の中で理解することは出来ない。亀山古墳においても、底部高が高いという点においては他古墳とも共通するが、外面調整に稚拙ながらもB種ヨコハケが認められ、王陵系埴輪からの技術の受容がみてとれる。二項対立的にいずれかの工人系譜の中でのみ理解するのは困難であり、工人系譜間でも技術交流がおこなわれながら変遷していったと考えるのが実態に沿うだろう。また生産体制についても、管見の限りでは亀山古墳と他古墳との同工品が見当たらず、玉丘古墳周辺で想定されるような複数古墳を包括した集約的生産供給（木村・中久保 2018、吉永 2023）でなく、個別的生産体制がとられていたようである。古墳群全体の生産体制については別稿を期すことにするが、亀山古墳段階では古墳造営の趨勢にあわせて生産体制のあり方にも変化が生じている公算が高い。

とはいえ、亀山古墳でみられた異なる系譜の工人グループによる協働生産が、玉丘古墳群全体にも

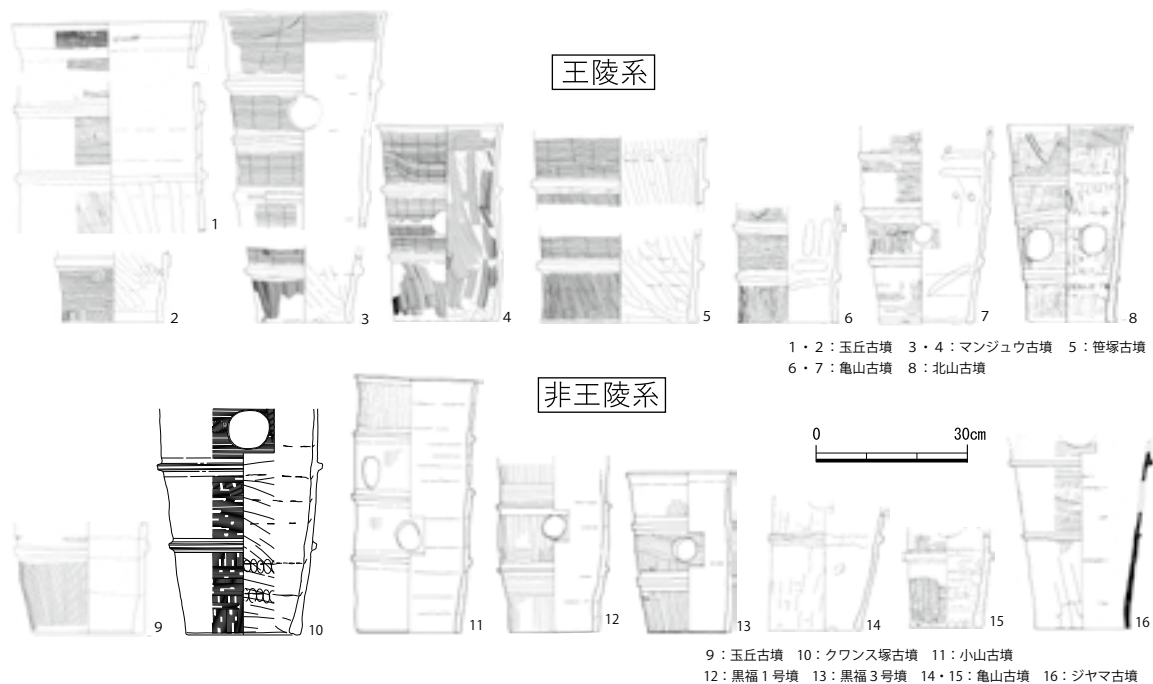


図5 玉丘古墳群出土土輪

認められることは重要である。工人の系譜や生産体制の動向には変化が生じながらも、製作を主導する熟練の工人グループと、相対的に未熟な工人グループが協働するという組織のあり方は、玉丘古墳やクワンス塚古墳を契機とする体制を大局的には継承しているものといえる。土輪列での樹立位置の違いにまで表れる両者の関係性は、玉丘古墳群ひいては地域における土輪生産組織のあり方を考える上で特筆に値しよう。

(2) 亀山古墳の再評価

ところで、玉丘古墳群全体の展開過程をみると、亀山古墳の造営にはやや特異な点が目立つ。まずひとつは立地状況である。玉丘古墳をはじめ多くの古墳は、山陵裾の平地に展開しており、山陵頂部に築造された亀山古墳はそれらとは独立している。菱田が指摘するように、西方の北条盆地側に広がりをもつ玉丘古墳等とは異なり、むしろ北方・東方の万願寺川や普光寺川、遠くは加古川の流域を見渡せる立地にある（菱田 2006）。こうした立地に起因して、亀山古墳周辺には陪塚のような近接する古墳が築かれない点も、大小の古墳が面的に配置されている玉丘古墳周辺の状況とは異なる。ほかにも、段築や周溝、葺石等も構築されておらず、主体部に使用された石材も玉丘古墳と同じ高室石でなく古墳が属する山塊の火山礫凝灰岩を用いる点（先山 2005）、そして土輪に関しても、形象土輪の存在が希薄で⁽⁵⁾、土輪列で検出されたピットの存在など、玉丘古墳群の他の古墳にはみられない特徴を指摘することができる。

このように、亀山古墳は玉丘古墳群の系譜上に素直に位置づけるには躊躇ってしまうような要素が多く認められる。その反面、亀山古墳の土輪工人の系譜や動員のあり方が玉丘古墳群全体と紐付けて捉えられる点が今あらためて重要になってくる。つまり、亀山古墳の造営には、玉丘古墳群の多くの

古墳とは異なる技術や論理が採用される中で、埴輪生産にかかる工人動員のあり方は、玉丘古墳群全体の脈絡の中で読み取ることができるのである。このように、亀山古墳の造営プロジェクトには、ほかの古墳にはない新たな要素を取り入れる画期性と、工人集団にみる伝統性という両側面が読み取れるのである。このような現象は、中期後半における玉丘古墳群での古墳造営における変化はもちろん、当該期における埴輪製作技法の省略化や生産体制の個別化といった王権中枢部での動向（木村2020）とも関連させて理解する必要があるだろう。

5. おわりに

玉丘古墳群では多くの古墳から埴輪が得られており、古墳時代中期における地域での埴輪生産のあり方を解明できる貴重なフィールドといえる。とりわけ亀山古墳では、原位置を保つものを含む多くの埴輪が出土しており、生産から樹立に至る諸相を検討できる素地が整っている点は、本稿でみてきたとおりである。今回検討したように、亀山古墳の埴輪生産組織は一定の技術差をはらんだ異なる工人集団から構成されており、そのグループごとのまとまりは埴輪列での配列秩序にも表れていることが分かった。そして玉丘古墳群全体の中でみたとき、古墳造営にかかる諸点で特異性が際立つ反面、埴輪生産に携わった工人の系譜や動員のメカニズムは、玉丘古墳群とのつながりの中で考えることができる。

筆者が十分に咀嚼できていないこともあり、本稿では曖昧にしてしまった点も多いが、玉丘古墳群全体での丁寧な分析が必要であることは言うまでもない。玉丘古墳群をひとつのフィールドにしながら、王権周縁部における埴輪生産のあり方を模索していきたい。

付記

菱田先生、ご退官おめでとうございます。拙い内容ではありますが、菱田先生がかつて発掘された亀山古墳の埴輪について検討できたこと、恐れ多く感じつつ光栄に思います。在学中のゼミでの鋭いコメントも、普段の朗らかな会話も、廊下から見える先生のお部屋の分厚い資料堆積層も、菱田先生から頂いた、大切な教えと思い出です。大学から先生が離れられると思うと寂しく感じますが、現職でも比較的身近にいらっしゃるので、まだまだ先生のお世話になる気です。今後も変わらず若々しくご活躍されることを願っております。

註

- (1) 埴頂部でも埴輪片が見つまっていることから、埴頂部にも埴輪列が存在していた可能性がある。
- (2) ハケメパターンの一致の要因が兄弟工具である可能性も否定できない。今回は資料の観察から、工具の貸借であるか兄弟工具であるかは判別しえなかった。なお、13-4のヨコハケと、ハケメパターンが共通したそれ以外のヨコハケでは、工具の天地が逆の関係にある。
- (3) こうした集中的配列が、サイズや器種で置き分けた、計画的な配列の結果とみることも可能だが、亀山古墳の埴輪においては大きなサイズ差や器種の違いはなく、古墳全体でデザインや立体性を意識した

とする積極的な根拠は見込めない。ただし、多少の器高差や透孔の配置を揃えるなど、埴輪列の視覚的な斉一性を意識した可能性はあるだろう。加古川市行者塚古墳では規格差のある複数の種類の埴輪が古墳全体で計画的に配置されていることが分かっている（大手前大学史学研究所・加古川市教育委員会 2024）。

- (4) 既往の研究では、「畿内系」「在地系」として設定されてきたが、王権中枢部で一般的な埴輪を「畿内」の埴輪として括るのを避け、また、「在地系」として地域内での伝統性や閉鎖性を強調してしまうくらいを排除するため、高橋や廣瀬の考え方にならいつつ、王権中枢からの直接的かつ体系的な影響が読み取れる「王陵系」と、そうでない「非王陵系」として呼び分けることにする。ただし、廣瀬のいう「非王陵系埴輪」は、須恵器系埴輪のように「王権中枢部では主流とはならず、かつそれとは異なる技術系譜のもとで系統的な展開を示す埴輪」（廣瀬編 2023 pp.15-16）を指し、本稿における、単に「王陵系埴輪」とは技術的に異なる一群としての定義とはややニュアンスが異なる。
- (5) 現在のところ、既往の調査で出土した遺物のなかに、形象埴輪と判断できる確実な資料は確認できない。

引用・参考文献

- 梅原末治 1939 「在田村亀山古墳と其の遺物」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第 14 輯 兵庫県
大手前大学史学研究所・加古川市教育委員会 2024 『加古川市西条古墳群 行者塚古墳 墳丘・造り出し篇』
加西市教育委員会 2005 『玉丘古墳群Ⅰ—亀山古墳—』
加西市教育委員会 2006 『玉丘古墳群Ⅱ—亀山古墳 2・笹塚古墳—』
木村 理 2020 「古墳時代中期における王権中枢古墳群の埴輪生産」『考古学研究』67-1 考古学研究会
木村 理・中久保辰夫 2018 「地域報告 播磨」『中期古墳研究の現状と課題 2 古墳時代中期の交流』中国四国前
方後円墳研究集会第 21 回研究集会発表要旨集・資料集 中国四国前方後円墳研究集会
先山 徹 2005 「付論 3 亀山古墳および笹塚古墳の石材」『玉丘古墳群Ⅰ—亀山古墳—』加西市教育委員会
高橋克壽編 2008a 『古代文化』59-4（特輯：王陵系埴輪の地域波及と展開（上））古代学協会
高橋克壽編 2008b 『古代文化』60-1（特輯：王陵系埴輪の地域波及と展開（下））古代学協会
菱田哲郎 2006 「第 4 章 まとめ」『玉丘古墳群Ⅱ—亀山古墳 2・笹塚古墳—』加西市教育委員会
廣瀬 覚編 2023 『季刊考古学』163（特集 埴輪からみた王権と社会）雄山閣
藤原光平 2022 「北播地域の中期古墳—玉丘古墳群を中心に—」『播磨の中期古墳』第 22 回播磨考古学研究集
会の記録 第 22 回播磨考古学研究集会実行委員会
森 幸三 2017 「北播磨の円筒埴輪—玉丘古墳群の出資料を中心に—」『播磨の埴輪』第 17 回播磨考古学研究
集会の記録 第 17 回播磨考古学研究集会実行委員会
森島一貴 2005 「第 4 章 出土遺物 1 埴輪」『玉丘古墳群Ⅰ—亀山古墳—』加西市教育委員会
吉永健人 2023 「4. クワンス塚古墳出土埴輪の評価」『クワンス塚古墳』加西市教育委員会
和田晴吾 1994 「古墳築造の諸段階と政治的階層構成」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流 5 名著出版